

シルヴィア・プラス

—— “Daddy” をめぐると考察 ——

木村 淳子

1963年2月11日、150年ぶりの寒さのロンドンで、シルヴィア・プラスが自ら30年の生涯に終止符を打った時、その衝撃は彼女を直接知る人には勿論のこと、詩を通して彼女と知り合った人々にも、極めて大きなものだった。1960年には処女詩集 *The Colossus* をイギリスで出版 (U. S. 版 *The Colossus and Other Poems* は1962年)、第二詩集 *Ariel* の出版の計画を進めていた頃であった。

The Colossus が出版された時、これを読んだ批評家達の多くは、プラスの詩の中に生への意志を読み取った。ジャドスン・ジェローム Judson Jerome は、「彼女は明晰な、想像力に溢れるしっかりとした詩行を書く。彼女は人生を愛している…何と稀な感応力であろう。(She writes a plump and stumping line that jolts with imagination and clarity... she likes life — Oh! rare response!）」⁽¹⁾ と言ったという。けれども彼女の死の後では、批評家達は *The Colossus* の中に読み取られる死の翳に注目しはじめた。M. L. ローゼンタール M. L. Rosenthal は、詩の中の「抗い難き動機 (irresistible motive)」を看過していたことで大いに己をとがめた⁽²⁾。1965年に *Ariel* が夫のテッド・ヒューズ Ted Hughes の手によって出版されるに及んで、批評家達はいよいよ *The Colossus* の「陰鬱な死の要素 (macabre and grisly elements)」に注目するようになり、この詩集は一種の case book とさえなりそうな気配であったという⁽³⁾。作者の自殺という衝撃的事件によ

って作品に対する見方が、全く変えられてしまったという、このエピソードは、作品研究の難しさの一端を物語っている。

さて、1962年秋から翌年2月の死にいたる期間は、詩人としてのシルヴィア・プラスにとって重要な期間である。詩神にとり憑かれたかのように、彼女はこの時期毎日早暁に起きて詩を書いた。そのすべてが、彼女自身の声を持ち、その声は彼女自身の内的世界を自在に表現している。1962年10月16日付の母への手紙には次のような記述がある。「私は作家、それも天才的な作家です。私には天分があります。私はいま、生涯において最良の詩を書いています。それらは私を有名にすることでしょう。(4)」この言葉通りに彼女はその死後、詩集 *Ariel, The Collected Poems* 等によって、詩人としての名声を確立したのであった。しかし、家庭人としてのプラスの現実の生活面では、必ずしも幸福だとは言えなかった。というよりも、結婚生活はすでに破綻を来しており、それを幾分なりと修復するために移り住んだデヴォンの田舎家に、家長はすでに不在であった。9月26日には、「やがておまえは、傍らに、木のように育つ / ひとつの不在に気づくだらう / … (You will be aware of an absence, presently, / Growing beside you, like a tree, / …) という詩行で始まる“*For a Fatherless Son*”と題する詩を書き、その中で彼女は父親不在の母子家庭の今後を予見している。プラスの晩年の数か月間に書かれた詩は、すべて、実生活の暗い翳の中から、或は苦悩に充ちた内面の深い淵から、堰を切って溢れ出した感がある。それ故に、この当時の諸々の伝記的事実関係や心理的な要因を知ることは、詩の理解に大いに役立つと考えられる。と同時に、「シルヴィアは、その芸術的な目標を達成するために、人物や事柄を実際あるところとは変えてしまった(5)」という母オーレリアの言葉も、私たちの思考の片隅に留めておかなければならないのではあるが。

“Daddy”は10月12日に書かれた詩である。B. B. C. のラジオ放送に

際して、プラス自身がこの詩に次のようなコメントを付している。「これはエレクトラ・コンプレックスを持った娘によって語られる詩です。父親は、娘がまだ幼くて、父さんは神様のような存在だと思っていた頃に亡くなりました。父親はナチ、母親はユダヤ人の血を引いているらしい、という状況が、娘にとって事態を複雑なものにしています。父と母のふたつの血が、娘の中で結び合い、せめぎ合うので、この緊張状態から解放されるために、彼女は小さな恐ろしい寓話を演じ切らなければなりません。⁽⁶⁾」

“Daddy” は次のように始まる。

You do not do, you not do
 Any more, black shoe
 In which I have lived like a foot
 For thirty years, poor and white,
 Barely daring to breathe or Achoo.

Daddy, I have had to kill you.

あなたはもうだめ、その中で私が
 30年間足のように暮して来た
 黒い靴は、もうおしまいよ
 可哀そうに、私は、蒼ざめて
 息することも、くしゃみもできなかった

父さん、私はあなたを殺さなければならなかった

このはげしい調子は、16連から成るこの詩の最後まで持続する。「私」はこれまで、幼い頃に亡くなった父に対する畏敬と思慕の念を抱きながら生きて来た。幼き日の「私」にとっては父は神さながらの存在であった。

Marble-heavy, a bag full of God,

Ghastly statue with one gray toe

大理石のように重い、神様がいっぱいつまった鞆のよう

灰色のつま先を持った恐ろしい巨像

ここに表現されている父のイメージには、処女詩集 *The Colossus* 中の標題作 “The Colossus” にうたわれている巨像としての父のイメージにつながるものがある。即ち、それ自身ひとつの神秘であり、神であるような壊れた巨像は、「私」が幼いうちに亡くなった神のような存在としての父である。と同時にそれはプラスの父オットーを想起させる姿でもある。“The Colossus” の中では、「私」は30年間、壊れた巨像を復元しようと、空しく努力して来た。同様に “Daddy” の「私」も、父をとり戻そうとして祈ったものだった。それは勿論かなわぬ望みである。この強い思慕の念が、「私」に父の母国語であるドイツ語を話したいと望ませ、父の故郷の町を探し出したいと願わせるのだが、平凡な名前その町を、同じ名を持つ多くの町の中から、どのようにして探し出したらよいのだろうか。そして、激しい響きを持つドイツ語は「私」の口の中にひっかかり、わなのように「私」を捕えてしまう。その時「私」はこの言葉がユダヤ人達を死の都、ダハウやベルゼンに駆り立てて行ったことに、また自分の中にもユダヤ人の血が流れていることに気づく。敬愛する父と共有するドイツ人の血、母から受け継いだユダヤ人の血が

「私」の中ではげしくせめぎ合うとき、「私」は愛憎ないまぜの桎梏に呪縛されてしまう。だが転機が訪れる。それは20才の時、自らの生命を断とうとして、救出された時である。

At twenty I tried to die
And get back, back, back to you.
I thought even the bones would do.

はたちの時、私は死のうとした
そうして、あなたの許へ帰ろうとした。
骨だけだって何とかなると思ったの。

But they pulled me out of the sack,
And they stuck me together with glue.
And then I knew what to do.

でも私は引き出され、
にかわで接着された。
それから何をすべきか私は知ったのよ。

死のうとすること、つまり父の許に行こうとすること、は、己を父と同化しようとする事だろう。しかし、それがかなわぬことになってしまった時、「私」は父に復讐を遂げることによって、己の生命を十分に生きようとする。

I made a model of you,
A man in black with a Meinkampf look

And a love of the rack and the screw.

And I said I do, I do.

So daddy, I'm finally through.

私はあなたの雛型を作った

黒い服の、忠誠なナチ党員の顔をした

いじめも拷問も好きな男よ、

そして私は結婚の誓いをした。

父さん、私はとうとうやったのよ。

不在によって「私」を苦しめる父の代りに、「私」の赤い心をふたつに噛みちぎり、自分はおまえの父だと言いながら、七年もの間「私」を苦しめた吸血鬼のようなあの男に復讐をする。それによって、「私」は己の生をとりもどすことができるのだ。言いかえれば、復讐は呪縛を解くためのひとつの儀式である。この詩は父や夫に代表されるような権力者としての男性に対する、女性の側からの告発・復讐の詩であり、さらに愛憎ないまぜになった、アンビヴァレントな人間の気持の劇化であり、浄化の過程を語る詩でもある、と言えよう。

If I've killed one man, I've killed two —

The vampire who said he was you

And drank my blood for a year,

Seven years, if you want to know.

Daddy, you can lie back now.

There's a stake in your fat black heart

And the villagers never liked you.
 They are dancing and stamping on you.
 They always *knew* it was you.
 Daddy, daddy, you bastard, I'm through.

ひとりの男を殺したのなら、ふたり殺したも同然—
 自分をあなただと言ったあの吸血鬼
 私の血を一年間吸った男、
 はっきり言えば、七年間。
 父さん、やっとあなたは休まれる。

あなたの肥った心臓にくいが打たれる。
 村人たちはあなたが嫌いだった。
 彼等は踊りまわって、あなたを踏みつける。
 それがあなただということを、みんなはいつも知っていた。
 父さん、ならず者のあなた、私はやり遂げたのよ。

こうして「私」は、村人たちと共に、中世の *dance macabre* を連想させるような、勝利の舞踏を踊るのだが、己を圧迫する者達に復讐し、甦える、というテーマは同じ年の10月23日から29日にかけて書かれた“Lady Lazarus”にも見られる。この場合は己を圧迫する者は、父や夫という身近かな存在ではなく、もっと普遍化された悪としてのナチであり、Lady Lazarus である「私」は死の灰の中から甦えって、「空気のように男達を食べ」て、永遠の生命を得る。(Out of the ash / I rise with my red hair / And I eat men like air.) また、10月27日に書かれた“Ariel”では、「復讐」は姿を消して再生、死の克服がテーマとなっている。早暁に起き出た「私」は愛馬エアリエルを駆って、遠乗りに出かける。やがて地平を赤く染めて太陽が昇ってくる。「私」は愛

馬と一体となって、朝露を蹴散らしながら、真っ赤な大鍋のような太陽めがけて跳びこんでいく。(I / Am the arrow, / The dew that flies / Suicidal, at one with the drive / Into the red // Eye, the cauldron of morning.) 甦りの生命を暗示するのは赤という強烈な色彩である。1962年の10月に書かれたこれらの詩には、復讐によって甦えり、永遠の生命に達する、というひとつの過程を読みとることができる。

“Daddy” について、エドワード・ブッチャー Edward Butscher は、その著 *Sylvia Plath: Method and Madness* の中で、「浄化がテーマであり、復讐がその手段である、(Purgation is the theme and revenge its vehicle.)」と言っている。また、プラスと非常に親しかった批評家アルヴァレス Alvarez は、はじめてこの詩に接した時に、これに詩というよりはむしろ、攻撃的、破壊的激しさを感じたという⁽⁷⁾。表面的にはプラス自身の言葉によれば、この詩は父に対するアンビヴァレントな娘の心情と、その心情を拭い清めて新たな人生に歩み出すための儀式の詩ではあろうが、当時のプラスの身辺の状況を考え合せば、吸血鬼のような黒衣の男、即ち夫に対する復讐をうたう詩であるとする読み方は、全く自然な読み方である⁽⁸⁾。そして彼女の伝記的な事実関係に注目すればするほど、当時の彼女の内面的な動機を知りたくなるのではあるが、残念なことに伝記的資料として私たちに残されている『日記』*The Journal of Sylvia Plath* の中には、この頃の日記が欠落している。『日記』はプラスの死後20年近く経って、夫のテッド・ヒューズの手によって公けにされたのだが、その際テッドは将来子供達に知らせたくないと考えた部分を含むノート一冊を、焼却処分付してしまったという。またもう一冊あったはずのノートは紛失して行方が知れないという。そこで、現在公けにされている日記には、1960年頃から死に到るまでの時期のものが欠けていて、プラスの日記から、当時の彼女

の心境を知ることはもはやできなくなってしまっている。

さて、この年も秋から冬へと季節が進み、やがて暮れようとするにつれて、真っ赤な朝の太陽の風景は色彩を失なって曇らされてくる。生命へと疾駆した「私」は目的を見失ってしまう。「私」の風景は、運命線を持たぬ掌のようにblankで、道はもつれ、からまって、もうどこにも通じなくなってしまう。(My landscape is a hand with no lines, / The roads bunched to a knot, / The knot myself,) しかも、そのもつれを作っているのは「私」自身なのである。やがて風景はいっそう暗くなり、濃い霧に閉ざされ、「私」はあたかも霧の中をさ迷う羊の如くになり、灰色の世界の中で暗い彼岸に誘われる。(They threaten / To let me through to a heaven / Starless and fatherless, a dark water.) それは、翌年2月の彼女自身の死を暗示するような、ひとつの詩的世界の展開である。

「問題の作家が本来詩人である場合には、人生と芸術、歴史（事実）と神話の間の結びつきが強く、これを分つことは難しくなる。(When the artist in question is primarily a poet, the relationship between life and art, history and myth, becomes even more intense and less patient of disengagement.)」とブッチャーは、*Sylvia Plath: Method and madness* の序文で述べている。シルヴィア・プラスは、彼女自身の history と myth とを組み合わせて、新しい詩的世界を創り上げた。“Daddy”はそのひとつの成果である。私達はこの詩のどの部分が真でどの部分が偽であるかを、詮索する必要は本来全くないのでなかろうか。詩が提示する世界に身をゆだねることができるのなら、これ以上の伴せはないのだと思う。新批評という時代の大波をくぐり抜けたあとでは、「作品を書いた人は、誰ひとり、作品のそばで生き、作品のそばにとどまることは出来ぬ。作品とは彼を、解雇し、

除去し、彼を生き残りに、無為の人に、なすべきことなき人間に、芸術が何ら依存するところなき無力な人間にする決定そのものだ。」⁽⁹⁾ というモーリス・ブランショの言葉を、ごく自然に受け取ることもできる。だが他方で、十代のプラスが母に語った言葉、「作品が公けにされてしまうと、その解釈は読者に委されてしまうのね。(Once a poem is made available to the public, the right of interpretation belongs to the reader.)」⁽¹⁰⁾も私たちの注意を惹く。そして、できることなら作品の意図に沿った読み方をしたい、と願う。文学作品に対するアプローチの方法、或は作品研究に作者の伝記的資料を持ち込むことの是非等については、これまで多くの議論がなされて来た。この場合、作者と作品の関係を肯定的にとらえた上で、新批評的な方法と伝統的な方法に二分されると思うが、作者が世間一般の読者に与える手紙としての作品を読み解くために、伝記的資料及び伝記的事実関係を、研究の一助として用いることは必要であろうと思う。最近の、読み手の側からの攻略としての読みの技術、文学受容の理論にも肯定できる部分は認められるとしても、人々に語りかける作者(詩人)の声に耳を貸すことによって、またその生涯を知ることによって、作品にアプローチしてゆきたいものだと考える。

<注>

- (1) *Protean Poetic*, by mary Lynn Broe, p. 43.
- (2) *ibid.*
- (3) *ibid.*
- (4) *Letters Home*, ed. by Aurelia Plath

“October 16, 1962.

Dear Mother,

I am a writer ... I am a genius of a writer;

I have it in me. I am writing the best poems of my life;
they will make my name.”

- (5) "Letters Written in the Actuality of Spring" in *Ariel Ascending*, by Aurelia plath.
- (6) *The Collected Poems*, Sylvia Plath, p. 293.
- (7) "Doing Away with Daddy : Exorcism and Sympathetic Magic in Plath's Poetry", *Critical Essays on Sylvia Plath*, by Guinevara A. Nance & Judith P. Jones.
- (8) 『詩人の素顔』, 皆見昭著, 研究社。
- (9) 『文学空間』, モーリス・ブランショ, 粟津・出口訳, 現代思潮社。
- (10) *Letters Home*, ed. by Aurelia Plath.